

Title	ハンガリー語を母語とする日本語学習者の複数局面ルートの移動事象を描写する表現
Author(s)	江口, 清子
Citation	人文学林. 2024, 1, p. 23-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95131
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ハンガリー語を母語とする日本語学習者の 複数局面ルートの移動事象を描写する表現¹⁾

江口清子

Motion Event Descriptions of Multiple Path Segments in Hungarian Native Japanese Learners

EGUCHI Kiyoko

Abstract

This paper aims to elucidate the characteristics of the expressions of B1-level native Hungarian-speaking Japanese language learners (J-L2(h)) by investigating the expressions of motion events involving three path segments (Source, Medial, and Goal) and determining the differences between these expressions and those of native Japanese speakers (J-L1). Compared with the expressions of B1-level native English-speaking Japanese language learners (J-L2(e)), J-L2(h) used fewer manner verbs and more path verbs. This suggests that J-L2(h) had established a one-to-one correspondence between Japanese path verbs and Hungarian preverb-verb combinations. Hence, the tendency of event segmentation or integration was also closer to J-L1 expressions among J-L2(h) than among J-L2(e). In contrast, while J-L1 often used compound verbs, J-L2(h) and J-L2(e) used simple verbs, indicating that the use of compound forms is a common challenge for B1-level Japanese language learners.

キーワード：ハンガリー語，日本語学習者，複数局面ルート

1. はじめに

本稿は、ハンガリー語を母語とする日本語学習者の表現（以下J-L2(h)）の特徴を明らかにすることを目的とする。考察対象として取り上げるのは、図1で示すような、3つの経路局面（起点、中間経路、着点）を含む移動事象である。

1) 本研究は、第49回日本ウラル学会研究大会において口頭発表した内容をもとに加筆修正したものである。発表時には数々の有益なコメントを頂戴した。また、本稿執筆に際し、匿名の査読者にいただいた示唆に富むご助言のおかげで、構成や内容において大幅に改善することができた。ここに記して謝意を表する。なお、本研究はJSPS科研費19H01264および、国立国語研究所共同研究プロジェクト「述語の意味と文法に関する実証的類型論」の助成を受けている。

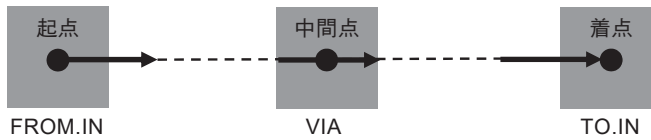


図1. 3つの経路局面（起点，中間経路，着点）を含む移動事象

このような事象を表現する際，英語と日本語とでは（1a, b）のような差異があることが指摘されている。

(1) a. The boy [ran [out of the house] and [past the park] [into the chapel]].

b. その少年は，[[家を] 出て]，[[公園の近くを] 通って]，

[[チャペルに] 入っていった]。

（松本他 2021: 179 (2)）²⁾

英語の例（1a）では，主動詞である様態動詞 *run* が *out of the house*, *past the park*, *into the chapel* という3つの経路句を取っている。それに対し日本語の例（1b）では，「出る」「通る」「入る」という3つの経路動詞が用いられ，各々が1つずつ経路句を取り，3つが別々の独立した節になっている。

J-L2(h)の母語であるハンガリー語は，この観点から見ると英語型であり，目標言語である日本語とは異なる類型に分類される。そのため，経路表出において母語との類型的な差異に起因する影響が見られることが予測される。

そこで本稿では，まず，J-L2(h)が日本語母語話者の表現（以下J-L1）とどのような点で異なるのかを検証する。同時に，英語を母語とする日本語学習者の表現（以下J-L2(e)），さらに，それぞれの母語の影響を確認するために，ハンガリー語母語話者の表現（以下H-L1）および，英語母語話者の表現（以下E-L1）と比較し，学習者の中間言語的特徴に母語はどこまで影響するのかを明らかにする。本稿で分析対象とする言語間の関係を図2に図示する。

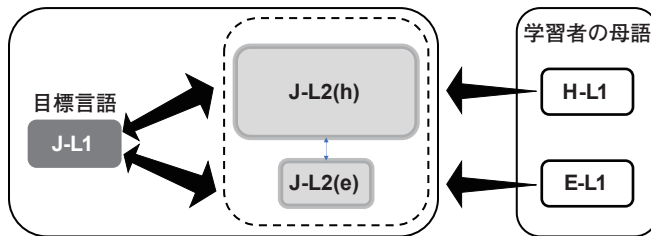


図2. 本稿で分析対象とする各言語間の関係

2) 括弧，主動詞の下線，および経路表現のゴシック体は執筆者による。以下同様。

2. 移動表現の類型論

2.1. Talmy 類型論とハンガリー語、日本語の類型論的特徴

移動表現には、移動物 (Figure), 参照物 (Ground), 経路 (Path), 様態 (Manner) などさまざまな概念が関わる。〈ボトルが浮かびながら洞窟から出る〉事象を例にとって考えてみると、移動物は〈ボトル〉, 参照物は〈洞窟〉, 経路は〈出る〉, 様態は〈浮かびながら〉となる。移動表現の研究で特に重要なのは Talmy による一連の類型論である (Talmy 1985, 1991, 2000)。そこでは、移動の経路を文中のどの要素で表すかによって、世界の諸言語が分類されている。1 つは英語の例 (2a) のように経路を動詞以外の要素で表すタイプであり³⁾, このタイプの言語は通常、動詞では様態を表す。もう 1 つはスペイン語の例 (2b) のように経路を動詞に語彙化するタイプであり、この場合、様態は動詞を修飾する分詞の形で表現される⁴⁾。

(2) a.	The	bottle	<u>floated</u>	out	(of the cave).	(Talmy 1991: 487)
		Figure	Manner	Path	Ground	
b.	<i>La</i>	<i>botella</i>	<u><i>salió</i></u>	<i>flotando</i>	<i>de la cueva.</i>	
	the	bottle	exited	floating	from the cave	
		Figure	Path	Manner	Ground	

‘The bottle exited floating from the cave.’

前者は付随要素枠付け言語 (satellite-framed language ; S 言語) と呼ばれ、後者は動詞枠付け言語 (verb-framed language ; V 言語) と呼ばれる。

本稿で扱うハンガリー語は、(3a) で示すように、経路を動詞以外の要素 (動詞接頭辞と格接辞、後置詞) で表すことから英語と同じ S 言語、日本語は、(3b) で示すように、経路を主動詞で表すことからスペイン語と同じ V 言語に分類される⁵⁾。

(3) a.	<i>A</i>	<i>fiú</i>	<i>be-fút-ott</i>	<i>a</i>	<i>pihenőhely-re.</i>
	the	boy	to.in-run-PST.3SG	the	gazebo-SUB
		Figure	Path-Manner		Ground-Path

‘The boy ran into the gazebo.’

3) Talmy はこれを「動詞と姉妹位置にあり、それを修飾する要素」と定義し、付随要素 (satellite) と呼ぶ。

4) Talmy は 3 つ目のタイプとしてアツゲウィ語の例に基づき、移動物 (figure) が動詞に語彙化されるものを挙げているが、本稿での論旨に直接関わらないため、議論の俎上に載せない。

5) 本稿の例文で使用する略号は以下のとおり。なお、形態素境界はハイフン「-」で、同一形態素内に複数の文法要素が含まれる場合にはその境界をギリオド「_」で示す。acc: 対格, all: 向格 (to.at), del: 離格 (from.at), ela: 出格 (from.in), f: 女性, gen: 属格, ill: 入格 (to.in), ins: 具格, nom: 主格, pl: 複数, poss: 所有, pst: 過去, sg: 単数, sub: 着格 (to.on)

b. 男の子が	走って	小屋に	<u>入った。</u>
Figure	Manner	Ground-Path	Path

ここで (3b) の日本語の例から、重要な事実を2点指摘することができる。1点目は、Talmyの言う「動詞」は、品詞としての動詞ではなく、あくまでも文の主要部としての動詞だということである。「走って」という様態を表す要素も品詞としては動詞だが、文中では従属節の動詞である点に注意が必要である⁶⁾。2点目は、スペイン語型の言語は、原則として主要部で経路を表すが、それ以外の要素で経路を表さないことは意味していない。(2b)におけるスペイン語の前置詞 *de* (from) や (3b) における日本語の格助詞「に」でも経路を表している。このことから、Matsumoto (2003) では英語型の言語は「経路主要部外表示型言語」、スペイン語型の言語は「経路主要部表示型言語」とすべきだという種類の再定式化を提唱しており、本稿でもこれに従う。

なお、日本語では「入った」の代わりに「入っていった」のようにダイクシス動詞をともなった複雑述語が頻繁に用いられることが報告されており、このような複合形式の前部要素を「準主要部」と呼ぶことにする。

2.2. 複数局面ルートの移動表現に関する先行研究

移動表現の類型に関する研究は数多くなされているが、そのほとんどは、様態、経路などの各移動事象概念がどの言語形式で表出されるかに焦点を当てたものである。さらに、分析対象となる移動事象に含まれる経路は1局面であることが多い。2局面を対象とした研究には Lakusta and Landau (2005), Ibarretxe-Antunano (2009) があり、どの経路局面が表出されやすいかという観点から分析され、起点よりも着点の方が描写されやすいという非対称性が指摘されている。Ibarretxe-Antunano (2009) は加えて、1つの動詞が取ることのできる経路句の数には言語間で差が見られ、多くの句が取れる言語を経路卓立性が高い言語だとしている。

3つ以上の局面を対象とした研究には、Bohnenmeyer et al. (2007) があり、そこでは、出発(起点:S)、通過(中間点:M)、到着(着点:G)の3つの下位事象(経路局面)を含む移動事象を、どのように分割し、構文化するかによって、諸言語を以下の3つのタイプに分けている。

- (4) a. Floyd [went [from Nijmegen] [across the river] [to Elast]].
 b. Floyd [went [from Nijmegen] [to Elast]], [crossing the river].
 c. Floyd [left Nijmegen], [crossed the river], and [arrived in Elast].

(Bohnenmeyer et al. 2007: 498)

6) ここでは、「(息が切れない程度に) 走って小屋に入った」のように、副詞句が「走って」のみを修飾することができることから、このようにテ形の後に動詞の項など別の要素が挿入されている場合には、本稿では、複雑述語の前部要素ではなく従属節と分析する。

(4a) は *went* というダイクシス動詞が3つの経路句を取って、3つの下位事象を1つの表現にしている (表現タイプA) が、(4b) は *went* が取る経路句は起点と着点のみであり、出発と到着を1つの表現にまとめ、通過を独立させており (表現タイプB)、(4c) は3つの経路動詞がそれぞれ別の経路句を取って、3つの下位事象を別々に表現している (表現タイプC)。Bohnenmeyer et al. (2007) は、これらのうちのどのパタンを多用するかという観点から、諸言語を表現タイプAを多用する言語 (Type I)、表現タイプAまたはBを多用する言語 (Type II)、表現タイプCを多用する言語 (Type III) の3つのタイプに分類し、S言語はType I、V言語はType IIIであるというように、Talmy類型論との並行性を論じている。

この点について、国立国語研究所のMEDAL (Motion Event Descriptions across Languages) プロジェクトでC実験と呼ばれる実験セットを用い、さらなる調査が進められてきた。吉成・ボルジロフスカヤ他 (2020) では、日本語、イタリア語、ロシア語、ハンガリー語、英語の5言語で、松本他 (2021) では、日本語の結果を再検討するとともに、ノルウェー語、アラビア語モロッコ方言、タガログ語、トルコ語についての5言語で比較検証を行っている。松本他 (2021) では、3つの下位事象のうち2つを統合する方法として、1) 起点を独立させるS/MG、2) 中間経路を独立させるM/SG、3) 着点を独立させるSM/Gの3通りが可能であるとし、分類の方法を以下のように修正している。

- (5) a. タイプ1: すべての局面を同じ動詞句内で表現する (松本他 2021: 185 (6))
 b. タイプ2: 3局面ある場合、1つの局面のみを別動詞句で表現する
 c. タイプ3: すべての局面を別の動詞句で表現する

吉成・ボルジロフスカヤ (2020) および松本他 (2021) で得られた結果を (5) に照らし合わせると、表1のようになり、タルミー類型論と事象分割のタイプは必ずしも一致しないことが明らかになった。

表1. 10言語における表現タイプ
 (吉成・ボルジロフスカヤ他 (2020) および松本他 (2021) に基づく)

	経路主要部表示型言語	経路主要部外表示型言語
タイプ1	タガログ語	英語, ハンガリー語, ノルウェー語
タイプ2	日本語, イタリア語	
タイプ3	トルコ語, アラビア語 (モロッコ方言)	ロシア語

(6a) は英語, (6b) は日本語, (6c) はロシア語で多く見られた例である。英語では3つの下位事象を1つの表現にしているが、日本語では起点のみを別の動詞句で表している (S/MG)。またロシア語では、様態動詞 *beža* (run) が、経路局面ごとに異なる接頭辞をともなって用い

られ、各々1つずつ経路句を取ることで3つの下位事象を別々に表現している。

- (6) a. A dog [ran [out of the goal] [under the bench] [into the cage]].

(吉成・ボルジロフスカヤ他 2020: 28 (9))

- b. 犬は [[ゴールから] 出て], [[ベンチの下から] [ケージに] 入っていった].

(松本他 2021: 185 (8a))

- c. *Sobak-a* [vy-beža-la] [*iz vorot*],
 dog-F.SG.NOM out-run-PST.F.SG out gate.PL.GEN
 [pro-beža-la] [*pod skameik-oi*],
 through-run-PST.F.SG under bench-F.SG.INS
 [za-beža-la] [*v kletk-u*].
 in-run-PST.F.SG in cage-F.SG.ACC

'The dog ran out from the gate, ran through under the bench, and ran into the cage.'

(吉成・ボルジロフスカヤ他 2020: 26 (7b))

ハンガリー語では、タイプ1の例 (7a, b) と、タイプ3の例 (8) が観察された。

- (7) a. *A kutya* [*ki-fut*] [*a kapu-ból*]
 the dog out-run.3SG the goal-ELA
 [*a pad alatt*] [*a ketrec-be*].
 the bench under the cage-ILL

'The dog ran out from the goal under the bench into its cage.'

- b. *A kutya* [*a pihenőhely-é-ről*] [*a pad alatt*]
 the dog the rest.area-POSS.3SG-DEL the bench under
 [*a ketrec-é-be*] *fut-ott.*
 the cage-POSS.3SG-ILL run-PST.3SG

'The dog {was running/ran} from its rest area under the bench into its cage.'

(Eguchi forthcoming)

(7a) では動詞接頭辞 *ki* (out) が用いられており、起点を表す経路句 *a kapu-ból* 「ゴールから」がその直後に置かれ、その指定に収まらない中間経路 *a pad alatt* 「ベンチの下を」と着点 *a ketrec-be* 「かごへ」は後置されていることから、動詞接頭辞の指定に収まらない経路句は共起しにくいことがわかる。(7b) の例では、動詞接頭辞を使わないことによって、単一節内に複数の経路句の共起を実現させたと考えられる。ハンガリー語の動詞接頭辞は経路表出に加え、

事象の終結性 (telicity) にも関わり、調査で使用されたような終結事象の表現には動詞接頭辞を用いる必要があるため、この事象の描写としてはかなり違和感のある表現である。

(8) では、3つの節に動詞接頭辞と格接辞がそれぞれ存在するが、動詞は1つ目の節の主要部の *szalad* (hurry) のみであるように見える。

(8) <i>A kutya</i>	[<i>ki-szalad-t</i>	[<i>a kapu-ból</i>]	
the dog	out-hurry-PST.3SG	the goal-ELA	
	[<i>át-Ø</i>	[<i>a pad alatt</i>]	<i>és</i>
	through	the bench under	and
	[<i>bele-Ø</i>	[<i>a ketrec-be</i>]	
	to.in	the cage-ILL	

'The dog ran from the goal, (ran) though under the bench, and (ran) into the cage.'

(Eguchi forthcoming)

しかし、Eguchi (forthcoming) は、(9) で示すような空所化であるとする分析 (Ackerman and LeSourd 1997) に依拠し、同様のものとして論じている⁷⁾。

(9) <i>Azután nyugodt léptek-ke</i>		
then calm steps-INS		
	[<i>ki-sétál-tam</i>	[<i>a folyosó-ra</i>]
	out-walk-PST.1SG	the corridor-SUB
	[<i>el-Ø</i>	[<i>a hátsó lépcső-höz</i>]
	away-Ø	the back stair-ALL
	[<i>föl-Ø</i>	[<i>a hatodik emelet-re</i>]
	up-Ø	the sixth floor-SUB

'Then I walked calmly out into the corridor, over to the back stairs, up to the sixth floor'

(Ackerman and LeSourd 1997: 87 (14))

ハンガリー語の動詞接頭辞はそれ自体で項を取ることができない。(9) の1つ目の経路句 *a folyosó-ra* 「廊下に」は動詞接頭辞 *ki* (out) と動詞 *sétál* (walk) の複合体 *ki-sétál* が取る項であるのと同様に、2つ目の経路句 *a hátsó lépcső-höz* 「後ろの階段の方へ」は動詞接頭辞 *el* (away) と動詞の複合体が、3つ目の経路句 *a hatodik emelet-re* 「6階へ」は動詞接頭辞 *föl* (up) と動詞

7) 吉成・ボルジロフスカヤ他 (2020) では、ハンガリー語はType Iに分類されていたが、Eguchi (forthcoming) では、この観察に基づき分析を変更し、分類を修正している。

の複合体が取る項であると考えられる。つまり、2つ目、3つ目の節の主要部にも音形のない動詞が存在するとし、1つの動詞が3つの動詞接頭辞と3つの経路句を取っているのではなく、1つの動詞につき1つの動詞接頭辞と1つの経路句を取っていると考える。

2.3. 複数局面ルートの移動表現における第二言語習得研究

移動表現について第二言語を対象に考察する研究は数多く存在するが、類型の差異に基づく、学習者の母語の影響、学習者の習熟度、中間言語的特徴などが検討されることが多く、複数局面ルートについて検証したものは、MEDALプロジェクトの研究以外では、管見の限り見られない。

Mano & Yoshinari (2017) は、本研究と同様の手法で行われた調査に基づき、日本語・英語の学習者の表現について、双方向での分析（日本語を母語とする中級英語学習者の表現 J-L2(e) と、英語を母語とする中級日本語学習者の表現 E-L2(j)）をそれぞれの母語（J-L1, E-L1）と対照させる形で行っている。そこでは、表現される経路局面の優先順位は、いずれの言語においても着点（Goal）> 中間経路（Medial）> 起点（Source）の順であり、使用された構文については、英語は E-L1, E-L2(j) とともに単文の使用が多いのに対し、日本語は J-L1, J-L2(e) とともに単文と重文が同程度に使用されていたことが報告されている。さらに L1 の経路表出方法は L2 に影響するかという問いに対しては、経路表出の割合において、J-L2(e) が E-L2(j) より有意に多かった点が挙げられている。その他、英語については、E-L2(j) で 40% が *through* を使用していた（*under* の使用が E-L1 では 100% に対し、E-L2(j) では 50%）点について、日本語の「抜ける」の影響の可能性が示唆されている。日本語については、J-L1 が複雑述語や複合動詞などの複合形式を使用していたのに対し、J-L2(e) では単純動詞が使用されていたことが挙げられ、学習者が複合形式を習得するのは難しいと結論づけられている。

しかし、学習者の表現の特徴が、母語の影響に起因するのか、目標言語の複雑さに起因するのかは、同一言語を学習する異なる言語を母語とする学習者の言語表現間で比較して初めて明らかにすることができる。

2.4. 研究課題

そこで本研究では、ハンガリー語を母語とする日本語学習者の表現（H-L2(j)）について、以下の4点に着目して分析し、それぞれの母語話者の表現（J-L1 および H-L1）と対照させながら考察を行う。

- 1) 経路の表出方法に J-L1 との違いはあるか。
- 2) どのように、また、どの程度様態を表出するか。
- 3) 表出されやすい、または、表出されにくい経路局面はあるか。

4) どのように事象を分割／統合して表現するか。

なお、その際、どこまでが母語であるハンガリー語の影響かを明らかにするために、E-L2(j)およびE-L1のデータも比較検討する。

3. 調査方法

調査にはMEDALプロジェクトのC実験の実験セットを用いた。C実験は44の移動事象を含むビデオクリップからなるが、本研究で分析対象としたのは44場面のうち、4場面である。その内訳は、2つの経路局面を含む移動事象3場面（1）起点-中間経路（/S-M/ 場面）、2）中間経路-着点（/M-G/ 場面）、3）起点-着点（/S-G/ 場面）と、3つの経路局面を含む移動事象1場面（4）起点-中間経路-着点（/S-M-G/ 場面）である。

実験参加者は、母語話者グループ3つ（J-L1, H-L1, E-L1）と、中級レベルの日本語学習者⁸⁾グループ2つ（J-L2(h), J-L2(e)）である。詳細は表2に示すとおり。

表2. 実験参加者

	J-L1	J-L2(h)	J-L2(e)	H-L1	E-L1
調査言語	日本語	日本語	日本語	ハンガリー語	英語
レベル	母語	B1	B1	母語	母語
母語	日本語	ハンガリー語	英語	ハンガリー語	英語
実験参加者数	15	16	13	15	15

調査は、実験者が実験参加者の横に座り、実験参加者にパソコンを操作してもらいながら、映像で見た移動事象を実験者に話すという形態で行なった。画面上の指示言語は産出を期待する言語（例：J-L2(h)の場合は日本語）のものを用い、産出された音声データは録音され、文字起こしを行なった⁹⁾。

各言語で得られた言語表現は、(10)で示すように、共通の基準でコーディングを行なった¹⁰⁾。

8) CEFRのB1レベル。

9) 対象とする各言語のデータ収集担当者は、J-L1：吉成祐子・眞野美穂、J-L2(h)：吉成祐子・江口清子、J-L2(e)：吉成祐子・眞野美穂、H-L1：江口清子、E-L1：眞野美穂である。

10) J-L2(e)のデータはMano & Yoshinari (2017)と、J-L1のデータはMano & Yoshinari (2017)、吉成・ボルジロフスカヤ他 (2020)、松本他 (2021)と、E-L1のデータはMano & Yoshinari (2017)および吉成・ボルジロフスカヤ他 (2020)と、H-L1のデータは吉成・ボルジロフスカヤ他 (2020)およびEguchi (forthcoming)と同一のものを使用しているが、いずれも本研究で新たに分析し直している。なお、J-L2(h)とH-L1、J-L2(e)とE-L1はそれぞれ異なる参加者グループによる表現である。

- (10) a. 犬が [[ゴールから] [[ベンチの下を] **通り-抜けて**]
 Figure Ground-Path Ground-Path Path-Path
 名詞関連要素 名詞関連要素 準主要部-主要部
 [ケージの中に] 入って-いった。 (J-L1 : /S-M-G/ 場面)
 Ground-Path Path-Deixis
 名詞関連要素 準主要部-主要部
- b. 犬が [[ゴールから] [ベンチの下に] 走って]
 Figure Ground-Path Ground-Path Manner
 名詞関連要素 名詞関連要素 主要部
 [[かごに] 入ります。 (J-L2(h) : /S-M-G/ 場面)
 Ground-Path Path
 名詞関連要素 主要部

(10a) は J-L1 の例であるが、「ゴールから 〈…〉 ケージの中に入っていった」と「ベンチの下を通り抜けて」の2つの節からなる重文である¹¹⁾。前者は「入っていく」という、前項は経路動詞、後項はダイクシス動詞からなる複合動詞を主要部とし、後者は「通り抜ける」という、前項、後項ともに経路動詞からなる複合動詞を主要部としている。経路は主要部／準主要部以外、名詞関連要素（格助詞あるいは位置名詞+格助詞）でも表されているが、様態は表出されていない。(10b) は J-L2(h) の例であるが、「ゴールからベンチの下に走って」と「カゴに入ります」の2つの節からなる重文である。前者は「走る」という様態動詞を主要部とし、後者は「入る」という経路動詞を主要部としている。経路は名詞関連要素（格助詞あるいは位置名詞+格助詞）でも表されている。

4. 調査結果

本節では調査の結果についてまとめる。

4.1. 主要部が表す概念

まず、類型を検討する際にもっとも重要な事項として、主要部で表された概念について確認

11) 松本他 (2021) は、カラ句がどちらの動詞句の一部であるかのテストとして、副助詞のシカを付加した句は、ナイなどの否定辞と同じ節になければならないという制約がある (Oyakawa 1975) 否定極性表現を用いている。(i) で示すように、カラ句 (+シカ) の後にポーズがあるかどうか、また、2つ目の動詞がテ形であるか連用形であるかによって容認度が異なるというもので、本稿でもこの基準に従って判定した。

(i) a. そのゴールからしか、ベンチをくぐってケージに入らなかった。
 b.* そのゴールからしかベンチをくぐって、ケージに入らなかった。
 c. ?? そのゴールからしか、ベンチをくぐりケージに入らなかった。

する。なお、2.1節で言及したとおり、J-L1では複合動詞や複雑述語のような複合形式が多く用いられるため、その前部要素を準主要部として分析し、検討の対象とする。まず、主要部で表された概念について確認する。図3は、1クリップあたりの主要部/準主要部が表す各概念について概念別に表出頻度を表したものである。

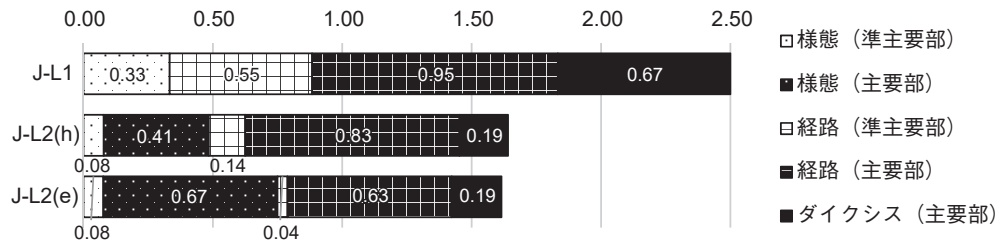


図3. 1クリップあたりの主要部/準主要部が表す概念別表出頻度

もっとも目を引く特徴としては、J-L2(h), J-L2(e)はJ-L1に比べて準主要部が用いられる頻度が低い点が挙げられる¹²⁾。つまり、J-L1は(11a)で示すように、複合動詞あるいは複雑述語のような複合形式を多く用いているのに対し、J-L2(h), J-L2(e)は(11b)で示すように、多くの場合、単純動詞が使用されていることがわかる。

- (11) a. 犬が [[ゴールから] [[ベンチの下を] 通り-抜けて]
 [ケージの中に] 入って-いった。 (J-L1 : /S-M-G/ 場面)
- b. 犬が [[ゴールから] [[ベンチの下を] 通って]
 [ゴールに] 入ります]。 (J-L2(h) : /S-M-G/ 場面)

また、動詞が表す概念という観点で見ると、J-L2(e)は様態で有意に多く、経路、ダイクシスで有意に少ないのに対し、J-L2(h)は様態、経路では有意差が見られず、ダイクシスでのみ有意に少ないことがわかった¹³⁾。つまり、L2間での比較においては、(12a, b)で示すように、

12) 準主要部の使用について、3(言語)×2(言及の有無)のカイ二乗検定を実施 ($\chi^2=57.956$, $df=2$, $p<0.1$, *Cremér's V*=0.467)。残差分析の結果、J-L1で有意に高く (*Radj*=7.530, $p<0.1$)、J-L2(h), J-L2(e)で有意に低い (J-L2(h): *Radj*=-3.178, $p<0.1$, J-L2(e): *Radj*=-4.650)。

13) 動詞が表す概念について、3(言語)×3(概念)のカイ二乗検定を実施 ($\chi^2=36.750$, $df=4$, $p<0.1$, *Cremér's V*=0.233)。残差分析の結果は以下のとおり。

	様態	経路	ダイクシス
J-L1	-4.909***	1.596	3.555***
J-L2(h)	0.831	0.964	-2.189**
J-L2(e)	4.757***	-2.868***	-1.745*

*** $p<0.001$, ** $p<0.01$, * $p<0.05$

J-L2(h)のほうがJ-L2(e)よりも様態動詞の使用が少なく、経路動詞の使用が多かった。

(12) a. 犬は [[ゴールから] [ベンチの下に] 走って] [[かごに] 入りました].

(J-L2(h) : /S-M-G/ 場面)

b. 犬は [[ゴールから] 走っていて] [[ベンチの下に] 行って]

[[ケージまで] 走りました].

(J-L2(e) : /S-M-G/ 場面)

4.2. 様態の表出

次に、様態の表出に着目する。2.1節でまとめたとおり、日本語は主要部あるいは準主要部で経路動詞を用いるのに対し、ハンガリー語・英語は主要部で様態動詞を用いる。そのため、日本語ではしばしば様態が省略されるが、ハンガリー語・英語では通常、高い割合で表出される。そこで、このような母語と目標言語の間の典型的な差異が学習者の表現に与える影響について考察する。図4は、各言語における、1クリップあたりの様態表出頻度を示したものである。すなわち、実験参加者が、1クリップに対して何回様態動詞を使用したかを表している。

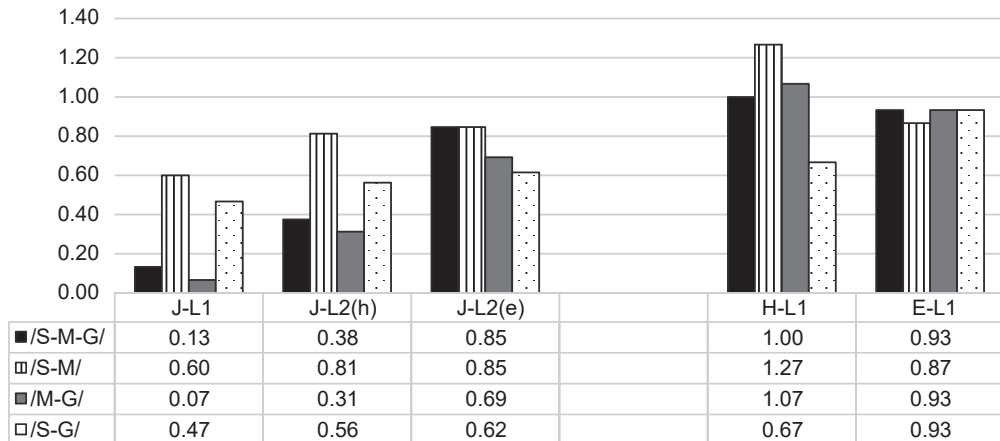


図4. 1クリップあたりの様態表出頻度

図4から、日本語回答者群では、H-L1およびE-L1に比べて、全体的に様態表出頻度が低いが、日本語回答者群間で比較すると、J-L1で有意に低く、J-L2(e)で有意に高いことがわかった¹⁴⁾。さらにJ-L2(e)では、場面間で大きな差が見られなかった。E-L1は、いずれの場面でもほぼ1回、様態動詞が使用されており、様態動詞を主要部とし、すべてを統合した1文で表現していると考えられるが、J-L2(e)の傾向は、母語であるE-L1のこの傾向と類似しており、母語か

14) 日本語回答者群間で、3(言語)×2(言及の有無)のカイ二乗検定を実施($\chi^2=13.346$, $df=3$, $p<0.1$, $Cremér's V=0.275$)。残差分析の結果、J-L1で有意に低く ($Radj=-3.013$, $p<0.1$)、J-L2(e)で有意に高い ($Radj=3.236$, $p<0.1$)。

らの影響があるといえる。一方、J-L2(h)の様態表出は、場面間で差がある。H-L1は /S-G/ 場面以外では様態表出が1以上であり、様態動詞を主要部にして1文に統合して表現するか、複数回繰り返していることがわかる (/S-G/ 場面ではダイクシス動詞が用いられる傾向が見られた) ため、J-L2(h)の様態表出の傾向はH-L1とはかなり異なる。/S-M-G/ 場面および /M-G/ 場面で表出が少ない点など、むしろ目標言語であるJ-L1に類似しているように見える。

4.3. 経路局面の表出

ここでは、各経路局面（起点、中間経路、着点）が表出された割合について検討する。常にすべての経路が表出されるとは限らず、表出されやすい経路、省略されやすい経路を明らかにするためである。図5は、各言語で経路局面が表出された発話の割合について、経路局面別（4場面合計）に示したものである。

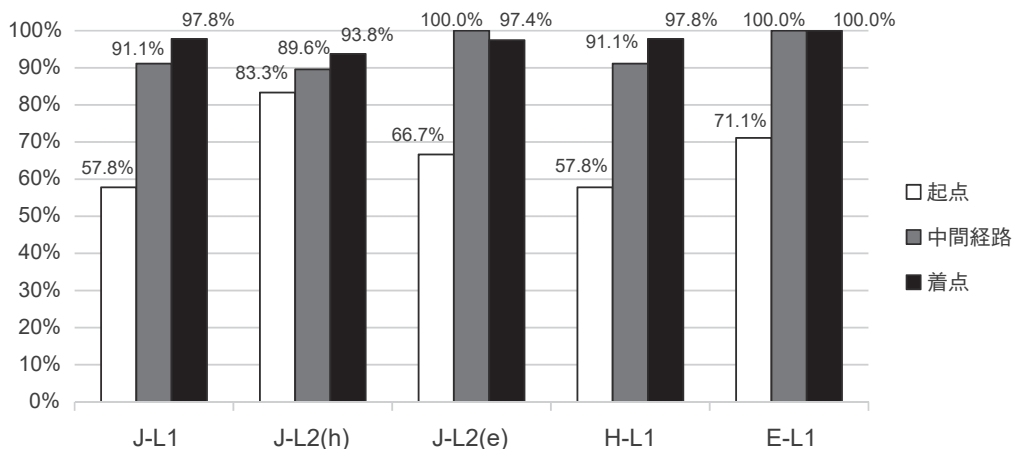


図5. 経路局面が表出された発話の割合（経路局面別・4場面合計）

図5より、中間経路と着点はどの言語でも高い割合で表出されているが、起点の表出は言語間で違いが見られた。起点の表出の有無を言語間で比較した結果、表出の割合は、J-L2(h)で有意に高いのに対し、J-L1とH-L1では有意に低いことがわかった¹⁵⁾。したがって、J-L2(h)でのみ起点も高い割合で表出する傾向は、直接的な母語からの影響とは考えられない。

15) 経路表出に関して、言語間で5（言語）×2（言及の有無）のカイ二乗検定を実施 ($\chi^2=13.805$, $df=4$, $p<0.1$, *Cremér's V*=0.240)。残差分析の結果、J-L2(h)で有意に高く (*Radj*=2.683, $p<0.1$)、J-L1、H-L1で有意に低い (J-L1: *Radj*= -1.985, $p<0.5$, J-L1: *Radj*= -1.985, $p<0.5$)。

次に、表出のあった経路局面について検討する。図6は /S-M-G/ 場面で表出された経路局面について、パタン別に示したものである（グラフ中の数値は回答数）。

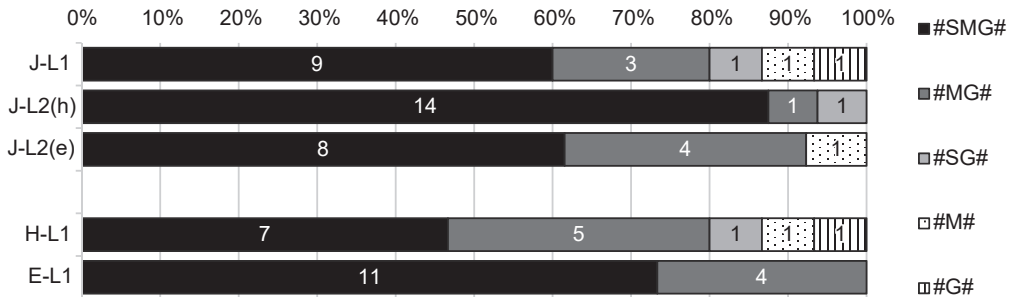


図6. /S-M-G/ 場面で表出された経路局面の割合 (/S-M-G/ 場面)

どの言語も、起点 (S)、中間経路 (M)、着点 (G) のすべての経路局面を表出した割合がもっとも高く、中でも J-L2(h)は、87.5% (14回答) で SMG すべてが表出されていた。

加えて、2局面の各場面で表出された経路局面の割合も検討するために、場面別のグラフを図7に示す（グラフ中の数値は回答数）。

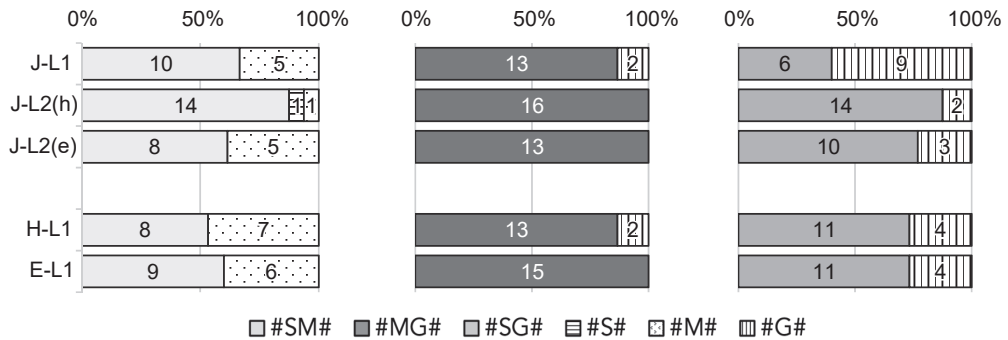


図7-1. /S-M/ 場面 図7-2. /M-G/ 場面 図7-3. /S-G/ 場面

図7. 各2局面場面で表出された経路局面の割合 (場面別)

図7の各グラフから、J-L2(h)では、いずれの場面でも両方の経路局面が表出されていることがわかる。その他の言語では、/M-G/ 場面 (図7-2) には、ほぼ両方の経路局面 (中間経路 (M) と着点 (G)) が表出されているが、/S-M/ 場面 (図7-1)、/S-G/ 場面 (図7-3) においては起点 (S) を表出しないパタンが見られることがわかる。ただし /S-G/ 場面では、J-L1 以外の言語表現では両方の経路局面が表出されているケースの方が多いのに対し、J-L1 だけが着点 (G) だけを表出するケースのほうが多い。

4.4. 事象分割の傾向

最後に事象分割の傾向について検証する。2.2節で概説したとおり、本研究で扱う日本語、ハンガリー語、英語は、事象統合／分割の観点から、それぞれ異なるタイプであるため、それが学習者の表現にどのような影響を与えているかを確認する。図8は、/S-M-G/場面での事象分割傾向を示したグラフである（グラフ中の数値は回答数）。当該経路局面すべてに言及のあった回答、つまり起点（S）、中間経路（M）、着点（G）の3つの経路局面をすべて表出している表現に限定して分析を行っている。

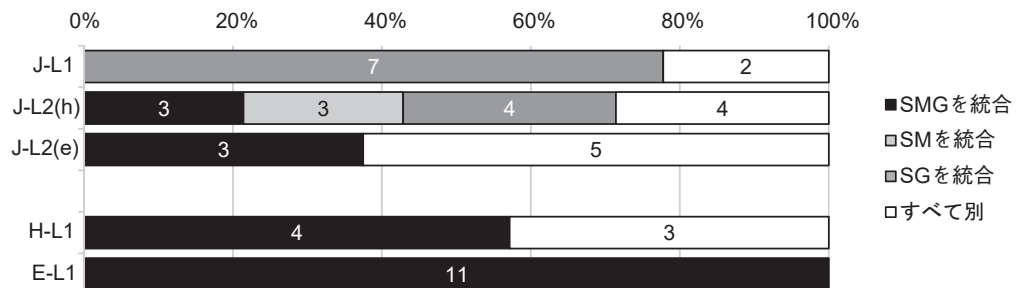


図8. 事象分割の傾向と経路表出（/S-M-G/場面）

まず、E-L1は常に1つの節に統合して表出する傾向が、H-L1は、すべてを統合するタイプ1と、すべてを分けて表現するタイプ3の両方の表現が同程度に観察された。それに対し、J-L1は起点（S）と着点（G）を統合する傾向、つまり中間経路（M）はどちらの経路とも統合されない傾向が見られた。これは、ハンガリー語や英語では、起点（S）、中間経路（M）、着点（G）のいずれも、前／後置詞や格接辞で表現することができるが、日本語には中間経路（M）を表す格助詞が存在せず、経路動詞を使う必要があるためだと説明することができる。

学習者の表現を見てみると、J-L2(h)、J-L2(e)ともに3つを統合するパターンが見られるが、これはJ-L1には見られず、学習者の母語であるH-L1とE-L1の両方で見られる表現であることから、母語の影響であると考えられる。一方で、J-L2(h)では、母語には見られない、起点（S）と中間経路（M）、あるいは、起点（S）と着点（G）を統合するパターンも多く見られた。

しかし、2局面の各場面で事象分割の傾向を見てみると、図9の各グラフで示すように、起点（S）と着点（G）は、英語以外の言語でも統合しやすく、中間経路（M）と着点（G）は英語以外の言語では統合しにくいことがわかる。

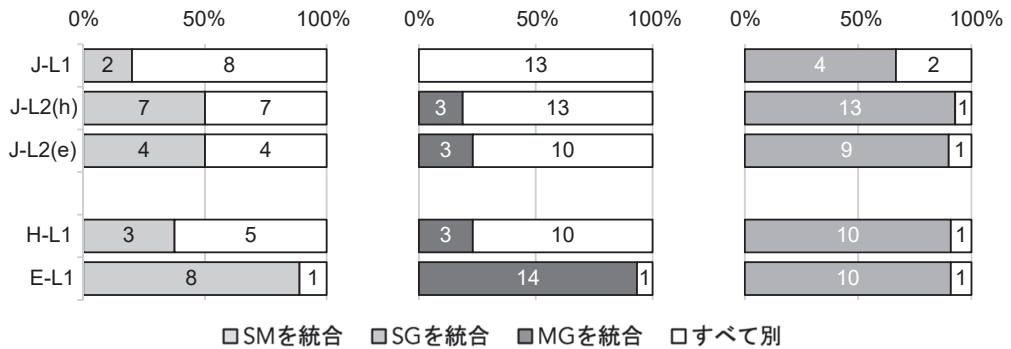


図9-1. /S-M/ 場面 図9-2. /M-G/ 場面 図9-3. /S-G/ 場面
 図9. 各2場面での事象分割の傾向と経路表出 (場面別)

5. 考察

本節では、2.4節で挙げた4つの研究課題について順番に考察していく。

5.1. 経路の表出方法

まず、J-L2(h)の経路の表出方法に、J-L1との違いはあるかについて考察する。主要部/準主要部における経路表出に着目すると、4.1節で見たように、J-L2(h)の特徴として、複合形式はほとんど使われないことが挙げられる。これはJ-L2(e)にも共通する結果であったが、J-L2(e)との比較では、様態動詞の使用が少なく、経路動詞の使用が多いことが示された。H-L1は単に経路動詞を主要部で用いないだけでなく、ハンガリー語にはそもそも経路動詞の数が非常に限られている(江口 2017, Eguchi 2020)ため、これは母語からの影響であるとは考えにくい。

そこで、この要因として考えられるのは、J-L2(h)の話者が、日本語の経路動詞を習得する際、動詞接頭辞と1対1対応させて記憶している可能性である。具体的には、「入る」= *be* (to.in), 「出る」= *ki* (out), 「通る」= *át* (through) といった具合である。英語にはこのような要素が存在しないため、これによって英語との差異についても説明することができる。なお、MEDALプロジェクトのA実験を用いた1局面の移動事象表現の日本語を母語とするハンガリー語学習者(H-L2(j))に対する調査で、動詞接頭辞+動詞を1つのまとまりとして、1対1対応させて習得している可能性(例: *fel-megy* (up-go) = 「上がる」, *be-tesz* (to.in-put) = 「入れる」)について示唆されている(吉成・眞野他 2020: 217)。逆方向でも同様の現象が観察されたことは興味深い。

5.2. 様態の表出頻度について

次に、J-L2(h)の様態表出について検討する。4.2節で見たように、J-L1と比べると、いずれの場面でも様態動詞が多く用いられており、様態動詞を主要部で用いる傾向のある母語(ハン

ガリー語)からの影響が見られるといえなくもない。しかし、同様に様態動詞を主要部で用いる傾向のある言語(英語)を母語とするJ-L2(e)と比べると、様態の表出は有意に少なく、かつ、J-L1と同じ傾向で場面間の差異が観察される。この事実から短絡的に、J-L2(h)のほうがJ-L2(e)に比べて習得が進んでいると結論づけることはできるだろうか。

2.1節で概説したとおり、ハンガリー語では通常、動詞接頭辞と格接辞/後置詞の2箇所を経路が表出されるが、日本語には動詞接頭辞に相当する表現手段が存在しない。ここで、5.1節で言及した、動詞接頭辞を経路動詞と1対1対応させて習得している可能性を仮定してみる。そうすると、J-L2(h)では、*be* (to.in) を表現するために経路動詞「入る」、*ki* (out) を表現するために経路動詞「出る」が使用され、結果として様態動詞が使われず、J-L1に近い表現となったのではないかと考えられる。複合形式の使用はJ-L2のいずれにおいても数は少なかったものの、J-L2(e)では5例のみであったのに対し、J-L2(h)では14例観察された。中でも、J-L2(e)では観察されなかった「*通って走る」「*渡って走る」のような経路動詞と様態動詞の組み合わせが6例見られたことは、J-L2(h)が動詞接頭辞を経路動詞と1対1対応させて習得している可能性を裏付けるものである。

5.3. 表出されやすい経路局面

さらに、表出されやすい、または、表出されにくい経路局面はあるかという問いについて検討する。4.3節で見たように、J-L2(h)のみが唯一、起点(S)、中間経路(M)、着点(G)のすべてを高い割合で表出していた点の特徴的である。他の言語ではいずれも起点の表出の割合が他の経路局面よりも低いため、目標言語の表現に近づいているとも、母語の影響とも考えにくいし、また、J-L2(e)と異なるため、学習者の表現に共通する傾向でもない。

考えられるのは、ハンガリー語での経路表出の習慣の影響である。2.2節で概説したとおり、ハンガリー語では、動詞接頭辞と格接辞/後置詞の2箇所を経路が表出されるが、終結的な事象の場合には必ず動詞接頭辞が用いられる。ただし、その指定に収まらない経路句との共起は難しく、そのためにH-L1ではいずれかの経路局面を表出しないという選択も取られた可能性がある。しかし、日本語で表現することによってそのような制約からは解放され、すべての経路局面を表現したのではないかと考えられる。

5.4. 事象分割/統合の傾向

最後に、どのように事象を分割/統合して表現するかについて考察する。4.4節でまとめたように、J-L2(h)の特徴は、J-L2(e)の特徴と大きく異なっていた。特にJ-L2(h)では、母語には見られない、起点(S)と着点(G)を統合するパターンも多く見られ、これは目標言語であるJ-L1の表現と同じ傾向なので、一見、習得が進んでいるとも考えられる。そこで、実際の表現を見てみることにする。(13)-(15)はJ-L1、J-L2(h)、J-L2(e)の/S-M-G/場面の表現例である。

(13) J-L1

- a. 犬が [[ゴールから] [[ベンチを] くぐって]] [[ケージに] 入った].
(SGを統合)
- b. 犬が [[ゴールから] 出て] [[ベンチの下を] 通って] [[ケージに] 入った].
(すべてを分割)

(14) J-L2(h)

- a. 犬が [[ゴールから] [[ベンチの下を] 通って]] [[ゴールに] 入ります].
(SGを統合)
- b. 犬は [[ゴールから] [ベンチの下に] 走って] [[かごに] 入りました].
(SMを統合)
- c. 犬は [[ゴールから] [ベンチの下に] [かごに] 入ります]. (SMGを統合)
- d. 犬が [[ゴールを] 出て] [[ベンチの下を] 走って] [[かごに] 入りました].
(すべてを分割)

(15) J-L2(e)

- a. 犬は [[ゴールから] [[ベンチの下] [ケージまで] 走ります].
(SMGを統合)
- b. 犬は [[ゴールを] 出て] [[ベンチの下を] 通って]
[[ケージに] 入りました].
(すべてを分割)

4.4節で、J-L1では、中間経路 (M) は起点 (S) とも着点 (G) とも統合されない傾向が見られた点について、日本語には中間経路 (M) を表す格助詞が存在せず、経路動詞を使う必要があるためだと説明した。J-L2(h)のほうがJ-L2(e)よりも経路動詞の使用が多かった事実に鑑みると、5.1節で述べたように、J-L2(h)は、<THROUGH> の概念を日本語の経路動詞と対応づけて習得することに比較的成功していることを意味している。加えて、母語であるハンガリー語では、経路を表す動詞接頭辞の指定に収まらない経路句は共起しにくいという傾向があり、日本語の経路動詞を使用する際にも、この影響を受けていると考えられる。

したがって、同じ主要部外表示型言語であっても、このような動詞関連要素を持たず、名詞関連要素でのみ経路表出を行う英語を母語とする J-L2(e)とは異なり、J-L2(h)は事象分割／統合の傾向においても目標言語である日本語に近いものとなっていると考えられる。

6. まとめ

以上のように、本稿では、ハンガリー語を母語とする日本語学習者の表現 (J-L2(h)) の特徴を明らかにすることを目的とし、起点、中間経路、着点という3つの経路局面を含む移動事象

の表現について調査し、目標言語である日本語の母語話者の表現 J-L1 との差異について考察を行った。英語を母語とする日本語学習者の表現 (J-L2(e)) と比較することで、類型を同じくする言語を母語とする場合でも、言語化傾向が異なることがわかった。

全体として、J-L2(h)のほうがJ-L2(e)に比べて経路動詞を多く用い、様態動詞用いる割合が少なかった。これは、J-L2(h)が、日本語の経路動詞を、母語であるハンガリー語の動詞接頭辞とダイクシス動詞との組み合わせで1対1対応させて習得している可能性を示唆している。それゆえ、事象分割／統合の傾向もJ-L2(e)に比べると、J-L2(h)のほうがJ-L1に近いものとなっている。

一方で、J-L1 が多くの場合、複合動詞や複雑述語といった複合形式を用いているのに対し、J-L2(h), J-L2(e)ともに単純動詞が用いられていたことから、複合形式の使用は中級 (B1) レベルの日本語学習者に共通する課題であると考えられる。ただし、本研究では日本語と類型を同じくする言語や、同様の複合形式を有する言語を母語とする日本語学習者について検証していないため、今後の課題としたい。

参考文献

- Ackerman, Farrell & Phil LeSourd (1997) Toward a lexical representation of phrasal predicates. In Alex Alsina, Joan Bresnan & Peter Sells (eds.), *Complex predicates*, 67-106. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Bohnenmeyer, Jürgen, Nicholas J. Enfield, James Essegbey, Iraide Ibarretxe-Antuñano, Sotaro Kita, Friederike Lüpke & Felix K. Ameka. (2007). Principles of event segmentation in language: The case of motion events. *Language*, 83 (3). 495-532.
- 江口清子 (2017) 「ハンガリー語の移動表現」『移動表現の類型論』, 39-64, くろしお出版, 東京.
- Eguchi, Kiyoko (2020) Patterns of deictic expressions in Hungarian motion event descriptions. In Yo Matsumoto & Kazuhiro Kawachi (eds.), *Broader perspectives on motion event descriptions*, 41-62. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Eguchi, Kiyoko (forthcoming) Path coding in Hungarian: Focus on preverbs. In Yo Matsumoto (ed.) *Motion event descriptions from a cross-linguistic perspective*, De Gruyter Mouton.
- Ibarretxe-Antuñano, Iraide (2009) Path salience in motion events. In J. Guo et al. (Eds.), *Crosslinguistic Approaches to the Psychology of Language*, 403-414. New York: Psychology Press.
- Lakusta, Laura and Barbara Landau (2005). *Starting at the end: The importance of goals in spatial language*, *Cognition* 96, 1-33.

- Mano, Miho, and Yuko Yoshinari (2017) Path to second language acquisition: Motion event descriptions in L1 and L2 English and Japanese. Oral presentation at the 14th International Cognitive Linguistic Conference.
- Matsumoto, Yo (2003) Typologies of Lexicalization Patterns and Event Integration: Clarifications and Reformulations, In Shunji Chiba et al. (Eds.), *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, 403-418, Kaitakusha, Tolyo. [Reprinted in *Cognitive Linguistics: Critical Concepts in Linguistics*, Vol. III. Ed. by Adele E. Goldberg, 422-439, Routledge, London, 2011.]
- 松本曜・鈴木唯・高橋舜・谷川みずき・長屋尚典・吉成祐子 (2021) 「複数局面を含む移動事象表現と言語類型論：日本語と他言語の比較」, 窪菌晴夫・野田尚史・プラシヤント パルデシ・松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 178-205, 開拓社, 東京.
- Oyakawa, Takatsugu (1975) On the Japanese sika-nai Construction, *Gengo Kenkyu* 67, 1-20.
- Talmy, Leonard (1985) Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In T. Shopen (Ed.), *Language typology and syntactic description, Vol.3: Grammatical categories and the lexicon*, 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard (1991) Path to realization. In C. Johnson, L. A. Sutton, & R. Shields (Eds.), *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 480-519. Berkeley: Berkeley Linguistics Society, University of California.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 吉成祐子・アンナ=ボルジロフスカヤ・江口清子・眞野美穂 (2020) 「複数局面ルートの移動事象を描写する表現の類型論的分析」, 松本曜教授還暦記念論文集刊行会 (編) 『認知言語学の羽ばたき—実証性の高い言語研究を目指して—』 22-38, 開拓社, 東京.
- 吉成祐子・眞野美穂・江口清子・松本曜 (2020) 『移動表現の類型論と第二言語習得—日本語・英語・ハンガリー語学習の多元的比較—』 くろしお出版, 東京.